



物語

藤本義一

まる
口物語

藤本義一



柴田書店

まる
もの
がたり
○物語

初版印刷 昭和四十九年八月二十日
初版発行 昭和四十九年九月一日

◎著 者 藤 本 義 一

発 行 者 柴 田 孝 子
発 行 所 饅 柴 田 書 店

東京都文京区本郷三三三三五
電話(013)六〇三一(代表)
振替口座 東京・四五一一五
郵便番号 一一三

印刷・製本 大日本印刷株式会社

乱丁・落丁の場合はお取替えいたします

目次

うなぎ起源	3
庖丁道	22
ライバル	40
高下駄	59
味泥棒	78
海へ	97
沖へ	117
水	136

0 ^{ゼロ}	157
チャンス	178
すっぱん甲斐	197
雑炊入門	218
○●○○一秒	237
独立	258
人生の慈味	277

うなぎ起源

(一)

「あっしやねえ、なんでも一流つうのが好きだねえ。江戸っ子つうのは一流好みじゃねえといけねえ」

奥座敷の男は床の間を背にして、齒切れのいい口調で氣炎をあげていた。年令としの頃は三十を一寸越えたところだろうか。彼の周囲には、彼の口調でいう「若え芸人」たちが鰻の料理を肴に盃を傾けている。どの芸人も貧しい服装ふくさうで、国民服を改造して背広に仕立て直したのを着ている男もいて、顔色は総体に悪かった。

「お旦だん、しかしまあ、この時代に、こんな結構な江戸前の鰻が食えるたア、夢みてえなもんですねえ。旨えや……」

箸に蒲焼の片を挟んだやつをしみじみ眺めていったのは、頭の禿げあがった落語家だった。前座の芸人、いや、前座見習までを東京から京都まで連れてくるこの細面の目許の涼しい男が一体何者なのかが十歳になったばかりの俊郎にはわからなかったが、まるでボールを投げ合うように交わされる芸人たちの会話が楽しくて、いつも座敷の隅で耳を傾けていた。

「服は昔っから銀座の店だ。洋品も靴もそうだ。ホワイト・シャツは麻布の白井だ。だが、今の時勢じゃ、そんな恰好をしてりゃ闇屋と間違われるのがオチだから、あっしや、こういう身なりをしているんだよなあ。しかし、食べ物ってやつは、金に糸目をつけちゃいけない。こいつは胃の中に入って外から見えねえだろ。栄養第一なんて考えて食ってはいけねえ。いいかい、衣、食、住の中で一番の贅沢というのは、なんてったって食よ。衣とか住で立派でも、舌が死んでりゃ生きている甲斐がないってものだな。いい服を着て、立派な家に住んで威張っている奴ア、こりゃ浅い奴だ。和菓子は本所三ツ目の因幡屋、洋菓子は麴町のシャトオブリアン、煎餅は浅草の昔煎餅、佃煮みてえなものはどこでもいいってもんじゃない。これは佃島の鮎十の味が絶品なんだ」

男は、さほど酒を飲んでいるわけではなかったが、饒舌だった。

なるほど、食物、料理ほど人間の贅沢の芯はないと俊郎は頷いた。外を飾るのは虚栄以外のなものでもない。しかし、美食をもって世の中の人は虚栄と呼ぶだろうか。

「マッカーサーが日の丸の旗をあげたっていいと今年になって許可したが、日の丸の旗を揚げな

くたつて、この戦後の四年間、あつしの胸の中にや日本人の心が日の丸を揚げつづけていたわけよ。日の丸を揚げたつていいつうのはこれは身なりみてえなもんだが、胸の底の匣の中に日の丸の旗をしつかり蔵しまつておく気概が食道楽つてもんだよ」

芸人たちは頷いた。言葉を返す者はない。返さないのも道理である。みんな一様に蒲焼を賞味しているからである。

「水ひとつにしてもそうだ。水道の水じゃいけない」

「へえ、じゃ、お旦だん、井戸水がいいんですかい」

前座の一人が男の顔色を窺うかがうようにいった。

「井戸水がいいってもんじゃねえよ。いいかい、水は下部温泉のミネラル・ウォーターが一番だ。こいつだよ」男は大きな黒靴の底から五合塚の大きさのちゃんと栓をした一本を抜き出し、とんと快い音をたてて、卓の上に置いた。

「へえ、マッカーサーみてえな名前の水でござんすねえ」若いのが奇妙なものを見る眼差で壇に詰った水を眺めた。

「どうして、お前、マッカーサーの水なんだよ」男は抗議するふうに、いった。

「だって、そうじゃござんせんか。ゼネラル・ウォーターってんで……」

「下手な洒落だね。ミネラルだよ。こいつの蓋をあけておいとけばいけねえ。ぐいぐい飲まな

くっちゃ、本当の値打ちは出ねえんだよ。ほんの少し、赤味がかつても、もういけねえんだよ……」

男は、持ちあげた壺の水を電灯の光に透かせて、目を細めたのだった。長い睫毛がひくひくと動き、男は真底からその水を愛しているようだった。俊郎は水をこれほど愛している男を今まで見たことがなかった。

「赤くなっちゃいけないんで……」禿げた落語家が掌で顔の脂をつるりと拭うようにして、膝を乗り出した。

「お前さんのいいたいこたア、ちゃんとかわかってるんだよ」

男は片手で制して、にやりと口許に笑いをうかべた。

「……だから、ミネラル・マッカーサーって奴は駄目ってんだろ」

「いや、おそれいりやの鬼子母神……たあ、このことだ」

「おや、いいね。その声、菊五郎張りじゃねえか。お前さん、落語家になったんが間違いだったなあ……。役者になりゃよかったんだよ……」

一座に笑いが生じた。

「まあ、楽しく食べりゃ、料理も喜んでくれるし、板さんも腕のふるいようがあるってもんだ……」

「……」

男は、さも旨そうに蒲焼を食いながら、関西風と江戸風の蒲焼の料理の違いについて語りはじめた。

「京風っていうのはな、ま、関西風っていうのはだな、鰻を腹びらきにして、頭をつけたまま、これを四十センチぐらいの金串に刺して焼く。炭火にのせるようにしてな。ほどよく焼けたところでタレをかけて、もう一度焼くんだな。こいつを二回ほどして、焼きあがってから一人前づつ切って、皿に盛るんだなあ」

「落語にも『素人うなぎ』というのがござんすねえ。ありや江戸風ってやつで、なかなか一朝一夕には出来ねえんですってねえ」

「開きが五年、串打ち八年、焼場は一生ってんだものな」

「前座が五年、真打ち八年で焼場に直行ってもんですな」

「そいつは調子がよすぎるぜ。前座が五年、真打ちなしで焼場というんだ」

「そいつはひでえや」

こんな話は京訛の洒落に慣れている俊郎にはテンポがあって面白かった。

「食ってる料理に辻講釈するのは野暮ってもんだがねえ……。ま、落語の材料になるだろうか、若えのは聞いておきな……」

若旦那は、江戸焼を詳しく説明した。背びらきで鰻をとり、生のまま一人前づつに切って、こ

れを十センチぐらいの竹串でさして、強火で白焼きにする。皮の方を主に焼き、身の方はあまり焼かずに、水をうって脂をぬき、蒸籠せいろうに入れて三十分ほど蒸すのだといい、これに各店秘密兵器のタレをつけて焼上げるといった。

「江戸焼は舌にのせるとろけちまうのがいいんだ。関西風は皮が固くて歯にのこるところがいい。シコシコと味があるってんだからな」

「どうして腹びらきにはお江戸はしねえんだろう」

「そりゃ、武士の心意気、切腹はいやだってんだろうな。関西は町人だもんで、腹を割って話そうてエンじゃないの……」

話は尽きなかった。突然、一人の前座見習の若者がいった。

「旦那、どうして蒲焼というんですかい」

不意にいわれて、男は狼狽した。

「蒲焼ねえ……ふーん、いうねえ」

「ぼく、知ってますわ」俊郎は膝を乗り出していた。

一同の視線がやってきて、赤面した。

「ふーん、いってみな……」

(..:)

「あの……鰻は大昔から食べたんですわ。万葉集にも鰻の歌があるそうです。昔は今のよう
に焼くという料理の方法がなかったもんです。丸のまま竹串にさして火にかけたもんです。そ
れが蒲の穂に似ていたから蒲焼というといえますけども……」

「なーるほどねえ、学があるねえ。じゃな、関西で、まむしっていうのはどういことだね」
「あれは御飯にまぜるのを関西流に誂たづつてマムシになったと聞いてますけども……」

「じゃな、蒲焼を飯の間に挟むというのはどういこと……」

若旦那は負けん気の強い男らしく、十歳の俊郎に鰻問答をかけてきた。

「さあ……」と首をかしげると、待てましたとばかりに切り込んできた。

「いいかい、ありやな、鰻の蒲焼が好物だという男がいたってわけだ。蒲焼ってやつは冷たく
なっちゃいけねえから、熱い飯を持って行って、その間に挟んで持って帰ったというのがはじま
りだ……」

「なーる……」

「さすがにもの識りだあね、旦那は……」

俊郎としては、気分のいいものではなかった。食通を標榜している男を尊敬していたのだが、蒲焼を飯の中に挟むといわれて、負かされたという気持ちになった。この時点で若旦那も俊郎も未っ子の我儘が共通していて、そいつが火花を散らした。

「あの……それ、ほんまですか」

「本当だよ」男は睨み返し、芸人たちも旦那の肩をもつように俊郎を睨み返した。座が白けた。なにか文句があるかいというふうな顔になった。

「証拠があるんでっか」

「証拠……そんなものはありやしないよ。そんなこといつてりや、誰がこの世の中で、はじめて鰻を食ったのか、章魚たこを食ったのか、海鼠なまこを食ったのか、お前さん、いえるかい。え、どうだい……」

またしても言葉に窮した。そういわれてみると、なんにもいえない。胸が、かつとなった。そのまま俯向いて立ちあがり、派手に障子あけだてを開閉して冷たい廊下に出た。京の底冷えが蹠あしうらから這ってきた。

「証拠って厳しいこといいやがるよ、あの坊主は……」そんな声が聞え、まあ、まあ、旦那、相手は子供じゃござんせんか、そう真面目まじめで怒っちゃいけませんやという声が聞えた。

父親に男の素性を聞きただしてみると、湯崎喜久雄だといい、東京の演芸界じゃ相当の男なの

だといった。

「お前は末っ子で芝居や落語が好きな性格^なやから、湯崎先生の弟子に頼んでやろか」

「いらんわい」

俊郎は父親の言葉を一蹴した。

「あの人はど氣前のええ江戸っ子はいたはらへんで……。兄ちゃんらは板前修業やさかいに、お前ぐらゐは風変わりなんがいてもええと思うてんのや」

父親は理解を示したが、俊郎は湯崎喜久雄に反感を抱いていた。しかし考えてみると俊郎を一人前の大人として対してくれたのが湯崎でもあった。十歳の知恵は、そこまで考える余裕がなかった。

「お父ちゃん、なんで御飯の間に鰻を挟むんや」

「それは冷めへんためとやなあ、上からダシをかけた時に万遍に御飯にいきわたるさかいやないかいなあ。大阪ではな、井鉢を蓋したままで引っくり返してから鰻丼を食べる人もいてるといふ話でな、明治から大正にかけて、それが粹な食べ方やという人もいたといふこっちゃ……」

「ふーん」

「それがどないしたて……」

「うん、それでな、冷めへんように考えた人は、何処の誰や……」

「なんやて……」

「鰻を御飯の間に挟むのんを發明しはった人は誰やねんな。アメリカ大陸をコロンブスが発見したように……」

「鰻の蒲焼を世間にひろめた人は、平賀源内という偉い人やと聞いたことがあるけれどもな、御飯に挟んだのは誰かわからへんで……アメリカ大陸とやな、鰻とでは大分ちがうさかいになあ……」

「誰に聞いたらわかるやろか」

「そんなもん、誰に聞いてもわからへんやろなあ……」

父親の顔は写楽の描く役者絵に似ていて、目許にいつも微笑をうかべている。俊郎はこの目許の微笑を五人兄弟の中でも、もっともよく受け継いでいた。だから二人が対立しても緊迫感が生じてこないのだ。

「おじいちゃんが生きてはったら、知ってはったかもわからんけども、それは無理な話やしなあ。なんし、お前のおおじいちゃんという人は、えらいもの識りやったというこっちゃけども……」

父親の祖父は鰻屋ではなかった。しかし、反骨の精神は人一倍あった。明治十七年に群馬県の郡長であった重固は、新潟県知事に赴任するのを蹴ったのである。重固という名前からして頑固一徹の感じだが、新潟県知事を嫌った理由は、見知らぬ土地でなんの行政が出来るか、土地はそ

の人たちが先祖から守りつづけてきた生物ではないか、それを外部の一人の男の采配に任ずるのは間違ひであると反論した。土地の長に妬心を抱く人が一人でもいると、その土地は生物から死物になっていくというのは正論といえる。世間の良識的判断からいくと名誉職はどんな理由にしろ受理しろということになるが、これ自体が重固には不愉快だったのだ。内的秩序を重んじるために一般の良識、常識の判断を拒んだのだ。非受動的な型の男だといえる。決して暴走の能動に馳られるわけではないが、自己の信じた一点は揺がせはしなかった。新潟県知事を辞退した重固は、東京本郷根津の須賀町に三千坪の土地を買い、神泉亭と名付けて温泉旅館を経営した。これも商才があつて出来たものではなく、財をすべてはたき出して、自分と他人の共通して愛するところとが出来る土地、家屋を持ちたい一心からであつた。商才の方は、むしろ専門家に任した方がいいだろうというわけで、すべてを神田明神下にあつた鰻屋「神田川」の親父に相談した。

「旅館にしる料理屋にしる、その根本にあるのは、簡単なことですよ。いいですか、旦那。商法は相手に喜んでもらうのが一番なんで、それ以外のことはありませんや。たとえば旅館の場合、当然都合がいいってこともありますが、ただ寝泊りだけで済むというもんじゃ、こりゃ商法ではない。誰だつて出来るもんですがね。もう一度来てみたい。用がなくなつたて来てみたいと思わさになりません。板前だつて同じことですよ。自分の舌を信用するのが第一ですが、その舌が絶対ということがあつちやいけない。過信つてやつは敵です。お客さんみんなの舌に味

がいいって喜んでもらわなくっちゃいけないわけさあ、え、そうでしょう……」

淡々と喋る鰻屋の主人に、郡長まで勤めあげた重固は耳を傾けた。

「板前が味をみるのは、腹の減った時じゃないけませんや。腹の減っている時は、なにを食べてみても旨いものでしょう。これは本当の味じゃないんですよ。だから家庭の奥さん方やお嬢さん方の料理と板さんの料理とはちがうわけだね。満腹の時に味をみて、うん、こりゃ旨いってものをお客さんにすすめなくっちゃいけませんや。あつしはね、人間生きてきて死ぬまでに、人間がやっておかなきゃいけないことがたつたひとつあると思うんですよ。それは他人さんに喜んでいただけることをやり抜いたという自負だけです。これが生甲斐ってもんじゃないでしょうかねえ」

重固は素直に頷いた。

「法律ってやつも、悪いことをしちゃいけないという一項目ありやいいようなもんですよ。それがどうです、第何条の第何項のって、いやというほどあるじゃありませんか。ま、そうやっておかなきゃ世間の治安というのは無理なんでしょうがねえ。あれをみれば、あつしはむかむかしてくるんですよ。人間を杓子定規に考えるなっていう怒りではなくて、この法律書ってやつは、てんから人間を信用していいえなと思うんですよ」

県条例に沿って人生を送ってきた重固は、この一言に激しいショックをうけた。いわれてみる